

4. 豆腐屋 ものがたり

<大山の嫁入り>

- ・ 兜山富子さんは、米子市古豊千の米屋の長女として大正 10 年に生まれた。
- ・ 26 才の時、大山寺で明治維新から豆腐屋を続けていた「とやま旅館」に嫁いだという。
- ・ 夫は、豆腐屋の三代目であり大山スキー創生期の名選手であった兜山登さんであった。登さんは大正 8 年生まれ 28 才であり、当時としてはかなり遅い結婚であった。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ 昭和 22 年 10 月 22 日祝言の日、家財道具をバスに詰め込み、花嫁衣装を着てバスに乗り込んだ。博労座で降ろされると、仲人さんが提灯を持って迎えに来ていた。
 - ✓ もちろんこの時点でお婿さんの顔など見ていない。嫁入り用の表付きの“ぶっくり”を履いて、山道を登っていった。石ころだらけの道に、何度も、何度もつまずいたことを覚えている。
 - ✓ 角隠しの中からおそろおそろ辺りを見回すと、だんだん山奥に入っていく。そこで、「分かった、分かった、26 才にもなる嫁入りは、姥捨て山に捨てられるのだ」と真剣に思ったという。(笑う)
- ・ ようやくたどりついたと思ったら、停電になってしまった。薄明かりの中で電話を掛けていた、登さんの後ろ姿を見たのが最初であった。その夜、停電の中で祝言が行われ、ハッキリと登さんの顔を見たのは次の日の朝であったという。

<豪円山の新婚旅行>

- ・ 嫁いで 4 日目、新婚旅行にでかけた。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ その朝、突然「新婚旅行に行くぞ！」と言われた。どこに連れていってもらえるかと思いついて歩いていった。すると、山の中へどんどん入っていく、別に手をつなぐわけでもなく後を付いていった。見晴らしのいい山に登っていった。
- ✓ 当時、良いところに連れてきてもらったと思っていた。今になって思えば、豪円山登山であった。(笑う)
- ✓ 新婚旅行の間、人っ子一人、猿の子一人、会わなかった。ただ一人、サカグチの前で留守番のおばあさんが、「アラマア！」と言って見送ってくれたのを覚えている。
- ✓ 今の若い子は堂々と手をつないで参道を上がっているが昔では考えられないと語る。

<昔の暮らし>

- ・ 兜山富子氏の姑ヨシコさんは、豆腐屋初代のウメノジョウさんの娘に当たり、生まれたときから大山に住んでいた。その頃、大山寺では牛馬市や大山参りのお客様を対象とした宿坊をしているところが多かった。牛馬市が立つときは、分けの茶屋の辺で女将さんが前掛けして宿坊の客引きしていた。
- ・ 伝承者が嫁いできた頃でも、本当にこの家に人が住んでいるのかと思うようなランプの薄明かりの中で生活していた家があった。

- ・ 大山寺では藁屋の家に炉が切っており、炭や薪をたいて暖を取っていた。猟で取ってきたウサギや狸を鍋などにして、その中に豆腐などを入れたりしていたという。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ 昔はよく雪が降っていた。3mも雪が降ると玄関が雪で埋まってしまう。リンゴ箱で雪をかためながら外へ出た。むしろ二階の窓の方がすぐに外へでられた。
- ✓ 大山で使う生活用具も、嫁いでくるまで見たことがないものばかりだった。
- ✓ 「わらぐつ」履いて「和カンジキ」を付けて外に出た。「みの」や「笠」など被ったことがなかったので、付け方すら分からなかった。

< 細腕で支えた豆腐屋の歴史 >

- ・ 米屋のお嬢様であった伝承者兜山氏は、大山に嫁ぐまで豆腐など作ったことがなく、豆腐づくりは嫁いできてから覚えたという。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ 朝の4時、石臼で豆を挽くところから豆腐づくりは始まる。うちの豆腐は、昔ながらの硬い豆腐であった。「まめをこほどばかり、水をこほどばかり、にがりをこほどばかり」教えられた通りにしか豆腐を作れなかった。
- ✓ 特に、春5月の新緑の時期と秋10～11月の紅葉の時期が忙しかった。

- ・ 今の駐車場のところに池があり、大山の下がり水が湧いていた。その水を台所の土間に引き込んできて豆腐を作っていた。
- ・ 水があまりにも冷たいため豆をかしても上手くふやけない。そこで一度水をお湯にしてからから豆をかしていた。これも大山ならではの豆腐づくりかも知れない。
- ・ 今は清水を止めてしまったが、初代ウメノジョウさんはこの清水があったからこの場所で豆腐屋を始めたのかも知れない。

☑ 伝承者 遠藤勝寿氏：

- ✓ 大山登山の帰りに行者谷を通り、大神山神社から参道を降りていると、参道沿いの側溝に桶に入った豆腐が置いてあったものだ。
- ✓ その豆腐は冷たく冷えており、とても美味しかったことを覚えている、登山で疲れた身体に浸みいるような感じであった。

- ・ 兜山富子氏が嫁いできた頃のとやま旅館は、収容が30人ぐらいの民宿であった。スキー客は伯耆大山や赤松からリュックやスキーを担いであがってきた。香川や高松など四国からのお客さんが多かったと言う。
- ・ 昭和47年 参道沿いの建物を建て増したときに、豆腐の製造を止めてしまった。その増築により収容300人の大山一番の旅館となった。
- ・ 昭和45年頃から昭和60年頃までが最盛期ではなかったであろうか。お客様から、どんどん問い合わせがあり、部屋がなくても廊下でいいから泊めてくれと言われた。実際に洗面所の前の廊下に布団をひいてお客様を泊めたという。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ 夫である登氏は全国スキー連盟の検定員や理事を永年勤めており、シーズン中には北海道、苗場、蔵王などのスキー場を飛び回っていた。
- ✓ 一番忙しい2月には、一ヶ月で5日ほどしか大山にはいなかったと言う。
- ・ そのため伝承者が一人で多くの従業員を使って旅館を経営していたという。
- ・ まさに大山の細腕繁盛記である。
- ・ 平成に入ってから大山寺を訪れるお客様が少なくなったが、とやま旅館には昔から続く手作りの胡麻豆腐を求めて、遠くは関西方面からも多くのお客様があるという。
- ・ 伝承者は昔を振り返って
 - ✓ 一番楽しかったことは、新婚旅行！
 - ✓ 豪円山をまわって草の中を帰ってきただけ、手一つつないでもらえなかったけれども一番心に残っている。それが昔なりの愛情であったのかも知れないと語った。

<大山豆腐屋物語>

- ・ 江戸時代まで大山は聖域であり、信仰に関わる人しか住むことを許されなかった、実際に古い絵図を見ても寺坊の名前しか出てこない。
- ・ しかし、一つだけ例外となっていたのが豆腐屋であった。全盛期、3000人もの衆徒を抱えていたという大山寺であるが、すべてが修業の身であり、肉は食べることが出来なかった。そういう中で豆腐は貴重なタンパク源として必要であったのであろう。そのため大山で豆腐屋をする権利は大変貴重であった。
- ・ 大山の豆腐屋は、歴史の舞台にもしばしば登場する。

☑ 伝承者 大山町誌：

- ✓ 天明年間の一揆に関わる松尾陽吉「大山騒動雑記」の記述として。
- ✓ 天明6年(1786年)12月10日八つ時(午後2時)一揆の一行は馬喰座鳥居前に集合した。(現在の宮本旅館の辺り)その数およそ五、六百人程で、大山寺領の総人口は宝暦12年(1762年)に3,800人位であったから全戸数の相当部分が参加したものと解される。願書の案文について、山手組のものは年貢減免のことを盛り込むように強く要望した。そこで各村の主だったものが下豆腐屋に集まって願書の作製に立会ったが、その骨子はすでに禅智院や経寿院によって作られており山手組の願は取上げられなかったようである。

☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：

- ✓ 江戸時代、大山寺には3件の豆腐屋があったことが知られている。一つは、洞明院から横手道に降りたところにあった西明院豆腐屋。もう一つは、現在のとやま旅館のところにあった上豆腐屋。残る下豆腐屋の場所は分からないと言う。
- ・ 大山寺理観院に伝わる幕末の絵図によると、上の豆腐屋の下手に「豆フヤ」の文字がありここが下の豆腐屋ではなかったかと思われる。

- ・ 初代ウメノジョウさんが大山で豆腐屋を始めたのは明治初年頃のことであった、広島県吉田村の村長の三男坊であった初代は、僧侶になるために大山寺にやってきた。
- ・ 当時、明治維新で混乱していた大山寺では、坊主は少し悪い人（前科者）がなるものだったので、坊主にはならず豆腐屋になったという。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ 豆腐屋を始めた頃（明治維新頃）大山には豆腐屋はなかったと聞いている。大山の遅い春、芽吹くマユミの実などの若葉が栄養源であった。
- ✓ 豆腐屋が出来てみんなが喜んだという。
- ・ 明治時代に入っても女人禁制が続き、明治9年になって解けた。その後も女性は月に一週間は下山させられていたと姑ヨシコさんは語っていたという。
- ・ 姑のヨシコさんは、明治20年頃大山で生まれて大山で生活してきたので、いろいろなことを知っていた。姑ヨシコさんは、いつも二つのことを自慢していた。
- ・ 一つは、お父さんである初代ウメノジョウさんの話である。
 - ✓ 「ウメノジョウは、吉田村のタツナガの17代目だよ！」
 - ✓ 「流れもんではないよ！」と自慢していた。
- ・ もう一つは、胡麻豆腐の話である。
 - ✓ 大神山神社の百畳敷きの間でだされた精進料理に、とやま旅館の胡麻豆腐が使われていたといつも自慢していた。
 - ✓ 明治時代の終わりから大正時代の話ではないかと思う。
- ・ 確かにとやま旅館の胡麻豆腐は本物である。最近、高野山などでも缶詰の胡麻で簡単に作る胡麻豆腐が売られている。しかし、ここでは胡麻を搗って手間暇をかけて胡麻豆腐を作る。新聞社などでも取り上げられ、京阪神からのお客様も多いという。

= 名選手を生んだ大山 =

- ・ 大山は、昔から多くのスキー選手を生んでいる。兜山登選手、山崎三姉妹、そしてオリンピックにも出場した大杖姉弟など数え切れないほどの名選手を生んだ。
- ・ その背景としては、スキーが生活の一部になっていたことがあげられる。冬学校に行くときは、スキーを履き、体育の時間はすべてスキー、そして放課後の遊びももちろんスキーと子どもの頃からスキー三昧の生活をしていた。そして、長年受け継いできたスキーの思いと、脈々と築いてきたスキー界での伝統が原動力となった。
- ・ 戦後しばらく大山寺分校では全校スキー大会を参道で行っていたという。

☑ 伝承者 清水正憲氏：

- ✓ 小学校全校が参加する大会であった。学年別か、年代別かよく覚えていないが、「ヨーイドン！」で5~6人が一斉にスタートする。
- ✓ 大神山神社の階段の上からスタートして、参道を通り博労座までのコースであった。大山寺山門のところでコースが急カーブする。そこがジャンプ台となっていてコースの難所であった。宮本旅館の辺はラクダの背のようになっており、下手に転ぶと家の玄関に突っ込むこともあった。

- ・ 今のように旗門を立てるようなことはしない、とにかく早くゴールした人が勝ちである。休憩しながら滑っても、直滑降で滑ってもいいのだが、ノンストップで滑ればかなりのスピードがでたであろう。
- ☑ 伝承者 兜山富子氏：
 - ✓ 小さい子ども達にとっては遊びのような大会であった。
 - ✓ 家の前の参道に出てみんなで応援して、「早や早や！コウちゃん、マアちゃん」などと声を掛けると、子どもが「なに？」と止まってしまう。
 - ✓ 「いや、早すべるだがん！（早く滑りなさい）」と喋って笑ったものだったと語る。

< 兜山登 >

- ・ 伝承者兜山富子氏の夫兜山登さんは、戦前の大山を代表するスキー選手であった。
- ☑ 伝承者 大山町誌：
 - ✓ 米子工業高校在学中の昭和 11 年 2 月に伊吹山で行われた第 15 回全日本スキー選手権大会の滑降でみごと優勝、翌年の第 9 回明治神宮体育大会（現在の国民体育大会）の回転競技で 3 位入賞をはたした。
- ☑ 伝承者 兜山富子氏：
 - ✓ ご主人から聞いた話であるが、昭和 12 年明治神宮大会 3 位になった。米子工業で盛大な壮行会をしてもらったと言っていた。
 - ✓ 全国を転戦し、北海道で合宿をしたあとオリンピックへ行った。ドイツのメルボルンのオリンピックに行ってきた。戦争が激しくなり外国に行くことは出来なくなったので、その後オリンピックには行っていないと語っていたという。
- ・ 昭和 11 年（1936 年）にドイツのガルミッシュで第 4 回の冬季オリンピックが開催されている。当時アルペン競技に日本人が参加したという記録がなく、兜山さんはオリンピックを見に行かれたのだと思う。それと前後してオリンピック候補選手に選ばれたようであるが、戦争が激しくなりオリンピックが開催されなかった。
- ・ 次に日本が参加した冬季オリンピックは、16 年後の昭和 27 年（1952 年）ノルウェーのオスロ大会であった。

< 山崎三姉妹 >

- ・ 戦後の大山を代表するスキー選手と言えば山崎姉妹である。
- ・ 山崎瑛子（きよこ）、君子、八重子の三人の姉妹が長い間全国の第一線で活躍した。
- ☑ 伝承者 大館禅雄氏：
 - ✓ 山崎瑛子さんは、兜山さんより少し年上だった。
 - ✓ 昭和 10 年大山で日活映画「白銀の王座」のロケがあったとき、主演の小杉さんの吹き替えをしたのがこの山崎瑛子さんだった。
 - ✓ 当ても、相当有名な選手であったのであろう。

- ・ 昭和 16 年赤倉で行われた第 11 回明治神宮大会で、姉妹三人で出場した府県対抗戦で 6 位となり、個人戦では八重子さんが滑降で 6 位となっている。
- ・ 戦後は、瑛子さんが第一線で活躍した。全国レベルの大会で常に上位入賞し、昭和 26 年赤倉で行われた第 6 回国体の滑降で優勝、回転で 2 位となった。
- ・ 翌年、現役を引退したが、全日本スキー連盟の役員を務めるなど大山ならびに日本のスキー界の発展に尽力された。

< 大杖姉弟 >

- ・ この山崎瑛子さんが全勢力を傾けて育てたのが大杖姉弟である。
- ・ 大杖美穂子、正彦の姉弟は、山崎三姉妹の次女君子さんの子どもである。山崎瑛子さんは、彼らの伯母さんにあたる。

☑ 伝承者 大山町誌：

- ✓ 美穂子さんは、小学校 5 年生より瑛子さんの指導をうけはじめた。昭和 34 年中学校 1 年生で全日本スキー選手権大会に初出場し、その後瑛子さんに連れられて全国の舞台上で活躍した。
 - ✓ 昭和 36 年中学校 3 年生で全日本選手権の滑降に優勝、回転で 2 位となり、一躍全国のトップ選手となった。一方、正彦さんは、高校に入ってから頭角を現した。
- ・ 昭和 39 年苗場で行われた全日本スキー選手権では、米子西高の美穂子さんが滑降と回転で二冠に輝き、米子工業高校の正彦さんが大回転で優勝し、姉弟でのアベック優勝となった。

- ・ 大山出身者の全日本スキー選手権での優勝記録を見ると次ぎようになっている。

大会		優勝種目	選手名	
昭和12年	伊吹山大会	少年男子	兜山学	米子工業
昭和37年	ニセコ大会	女子滑降	大杖美穂子	米子西高
昭和39年	苗場大会	男子大回転	大杖正彦	米子工業
		女子滑降	大杖美穂子	米子西高
		女子大回転		
昭和42年	白馬大会	女子滑降	大杖美穂子	日本大学
昭和43年	苗場大会	男子滑降	大杖正彦	慶応大学
		女子滑降	大杖美穂子	日本大学
		女子大回転		
昭和44年	志賀高原大会	男子大回転	大杖正彦	慶応大学
		男子回転		
昭和46年	札幌大会	男子大回転	大杖正彦	デサント

全日本スキー連盟HPより

- ・ その後、二人は世界の舞台へと飛び出した。
- ・ 大杖美穂子
 - ✓ 昭和 39 年米子西高 3 年生で世界選手権シャモニー大会の日本代表に選ばれた。
 - ✓ 昭和 43 年日本大学 4 年生でフランスのグルノーブル五輪に出場し、滑降、大回転に出場し、共に 36 位の成績であった。
- ・ 大杖正彦
 - ✓ 昭和 44 年大学卒業後スイスにスキー留学をはたした。
 - ✓ 昭和 47 年札幌五輪に出場し、滑降 35 位、大回転は失格に終わった。
- ・ この時代が大山におけるスキーの歴史の中で最も輝いていた頃であろう。

<遅咲きの名選手“椎木喜久男”>

- ・ 椎木氏は、大山国体で男子壮年の部大回転で2位になり、みごと地元の期待に応えた。
- ・ 当時37才であった椎木氏は、現在大山町の町議会議員を務める。昭和9年生まれで、大山町種原から佐摩小学校まで4kmをスキーで通っていたという。
- ・ なぜ、そんなに強くなったのか？と問うと。

☑ 伝承者 椎木喜久男氏：

- ✓ 大学を卒業して大山に帰ってきた頃、山崎瑛子さんから大杖姉弟など地元選手の面倒を見てくれと言われた。監督兼コーチとして選手たちと行動をとにした。

- ・ 伝承者椎木氏は、大杖姉弟たちと一回りほど年が離れている。
- ・ 選手たちと一緒に全国各地を飛び周り、一緒に滑っていたためスキーを履く時間が長かった。札幌オリンピックの全日本女子のコーチングスタッフになり、オリンピックの滑降コースを滑る機会に恵まれた。この経験が大きな自信となったと語る。
- ・ また、日本の一流選手やコーチングスタッフと仲良くなった。彼らとは、いろいろな大会で一緒になり、遠征先でも練習するとき便宜を図ってもらえた。そのお陰で、どこに行っても萎縮しなくなり、選手たちが安心して練習できるようになった。
- ・ このコーチとしての経験がその後の選手生活に大きなプラスとなった。とにかく自分の実力を出せば勝てるという自信ができた。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 椎木さんは努力型である。練習量もさることながら、いろいろなところから情報を集めてきて良く研究していた。優秀な選手の滑りを見て勉強したと語る。

☑ 伝承者 椎木喜久男氏：

- ・ スキー上達のポイントを問うと。
 - ✓ みんな勝ちたいと思っているが、自分の実力が出せない。ポイントは、スキーに対する情熱を持ち、相手を知り、勉強すること。とにかく経験を積むことから始まる。
 - ✓ そして失敗を重ね、成功したときのデータを自分のものにする。
- ・ 今後のスキー選手育成について問うと
 - ✓ 大杖姉弟などが県外にでてしまい、県内に目標となる選手が一度にいなくなってしまう。この辺が今、選手が育たない一つの理由ではないか。
 - ✓ 科学的な練習などは必要ない。まず、繰り返し、繰り返し、練習すること。
 - ✓ 今の選手は練習の絶対量が足りないと思うと語る。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 選手の育成について大山だけは限界がある。特に近年の技術は変わってきており、いち早く変化に対応する環境が必要である。全日本クラスの良い選手と競い合い、よいコーチから指導を受ける。
- ✓ 幸い全日本には、大杖兄妹をはじめとする大山の出身者がたくさんいる。今ならまだ間に合う、この人脈をうまく利用することが必要である。